

## はじめに

本書は、ますますビジネス・チャンスが拡大する携帯電話向けのサイトで、電子書籍を販売して収入をあげる方法を紹介する。

文章は他人に書かせてもよいのだが、どういうものを書けばいいかわかっていないと、他人にたのむこともできないというわけで、本書はあなた自身が書くことを前提に話を進める。

売れる本を書くのは意外に簡単で、ハウトゥ本を書けばいい。

ハウトゥ本または「ハウツー本」「HOW TO 本」というのは、「実用書」「入門書」などとも呼ばれる。

ビジネス関連や趣味・スポーツ、パソコンの解説書、悩みの解決法など、「～のしかた」

というタイトルで表現できるような内容はすべて含まれる。

本屋だと、「新書」といったコーナーにならんでいるものが代表的だ。

世の中のベストセラーのほとんどがハウトゥ本だということを知っているだろうか。

小説はよほどの人気作家か賞でも獲らなければ相手にされない。

エッセイは昔からの固定ファンがいる著者か、芸能人、有名人の本しか売れない。

ようするに、ニュースになるような話題性になればヒットはむずかしい。

ところが、ハウトゥ本だけは内容主体で、無名の著者が何十万部売るのも珍しくない。

そのハウトゥ本ばかりを携帯電話で読めるようにしたサイトができた。

1 Coin-Books という。

電子書籍の販売は、パソコン向けには定着してきたが、携帯向けとなると、技術的な制約もあって、個人がなかなか参入しにくい。

そんななか、1 Coin-Books は原稿を広く個人からも募集している。

本書は新しい書き手の育成を目的として書かれた。

いまや、個人の文化生活は多くを携帯電話に依存している。

デジカメ搭載はとっくに常識となった。

この先、動画やインターネットも携帯端末が見るのが一般化するだろう。

音楽関係は携帯端末へのダウンロード販売がCDの販売数を抜いた。

CDシングルでは年1作あるかないかとなったミリオンセラーが携帯ダウンロードではぞくぞく誕生している。

小説が売れないと言われるなか、ケータイ小説がバカ売れしたのは記憶に新

しい。

いまや先に携帯でヒットした作品が書籍化され、ベストセラーになるという順序で、この傾向は今後、どんどん加速するだろう。

反面、ここまで定着すると、もはやケータイ小説というだけでは話題にならない。

となると、やはりハウトゥ本が確実だ。

しかし、こうした文章の書き方を教えてくれる本はなかなかない。

お金を生む文章を書くにはコツがいる。

我々のことを少し述べると、インターネットが日本に普及しはじめた90年代半ばより10年以上にわたって、さまざまなネットビジネスにたずさわってきた。

メールマガジンを出せば業界トップの人気を誇り、大手出版社をはじめ、さまざまなところに原稿を提供してきた。

2006年に法人化してからは、パソコン向けの電子書籍も手がけている。

そうした実績もあり、1 Coin-Books の立ち上げ時には、真っ先に原稿を依頼され、サイトに関する相談にも乗っている。

1 Coin-Books は原稿の選定から携帯向けの「製本」、販売まで従来の出版社兼書店に相当し、広告も自社でおこなっている。

こうした経緯や裏話はそのつど入ってくるので、我々は売り手側の都合も、書き手側の事情も、さらには読み手側の要望も承知した執筆法を紹介できる。

本書を開いた人は、大きく2つに分かれるだろう。

お金もうけに興味があって、どうやれば携帯サイトで収入をあげられるかを知りたい人と、文章を書くことが好きで、なんとかそれで収入をあげられないかと考えている人だ。

ビジネス志向の強いタイプとライター志向の強いタイプと言い換えてもいい。求めていることは、どちらも「稼げる文章を知りたい」ということだ。

初心者には、いきなりハウトゥ本を書いてくれといっても、「なにをどう書いていいかわからない」

と悩むにちがいない。

なにを というのは内容のことであり、どう というのは文章についてだ。

おもしろいとか役に立つと言うときは内容に着目しており、うまいとか読みやすいと言うときは文章を重視している。

この両方を身につけなくてはならない。

ひとつひとつの文章がいくらうまくたって、お金は稼げない。

歌がうまいからって、人気歌手になれるとはかぎらないのといっしょだ。

本書は、たんなる文章の書き方を越えたビジネス書としての要素を含んでいる。

文章術としては、初心者が即戦力ライターになれるほどのノウハウをつめ込んだ。

自分が選んだ題材を豊富な実例にあてはめてマネるだけでも、かなりのものが書ける。

それを 1 Coin-Books で発表すれば、大勢の読者を得ることも夢ではない。

なにせ 1 Coin-Books は複数の大手携帯電話会社の公認サイトなので、TVで言えば全国ネットに相当する。

もっとも、本書の内容は 1 Coin-Books にかぎった話ではなく、もっと一般的な「ハウトゥ本の書き方」として、また、ゆくゆくはプロのライターになって、雑誌などに原稿を書きたい人にも役立つものとなっている。

本書は、全体が4編に分かれている。

クオリティを左右する企画編では、魅力的な題材の簡単な見つけ方を紹介する。

1 Coin-Books のフォーマットを例に解説する構成編では、この通りにならねば、1冊仕上がるという組み立てを示す。

一般人にも使える作文術にふれた執筆編では、書くために必要な文法について述べる。

仕上げにまつわる心得編では、商品としての文章はどうあるべきか説明する。

とくに 1 Coin-Books や携帯サイト向け原稿だけにまつわる特殊な事情については、1 Coin-Books Information というコーナーを企画編と構成編に設けた。

本書で原稿と言うときは 1 Coin-Books で発表することを念頭においており、すべての携帯サイトや電子書籍にあてはまるわけではないことをお断りしておく。

内容をじゅうぶんにマスターすれば、あなた自身で応用できるはずだ。

タイトルに「印税生活」とあるのは「お金のとれる文章」のヒントを満載しているという意味であって、印税が稼げるかどうかは、あなたの実力と今後の努力しだいである。

また、1 Coin-Books で電子書籍を販売してもらうためには、運営会社である(株)ハーツエンタテインメントの審査を通過し、規約にしたがう必要がある。

書き上げたあとのことについては、心得編のあとの「おわりに」に記した。

## もくじ

### はじめに

#### 企画編

##### 第1章 ハウトゥ本の本質

- 【01】どんな内容が求められているか
- 【02】あなたの情報を欲しい人がいる
- 【03】うまい文章と稼げる文章
- 【04】ニーズはどこにあるのか
- 【05】異議申し立て

##### 第2章 コンセプトを固める

- 【06】モチーフとテーマはちがう
- 【07】テーマの見つけ方
- 【08】テーマからセオリーへ
- 【09】セオリーからメッセージへ
- 【10】リピート質問法

##### 第3章 材料をそろえる

- 【11】タイトルは3度考える
- 【12】ネタ出しのしかた
- 【13】調査をしよう
- 【14】取材をしよう
- 【15】なにを書き書かないか

#### 構成編

##### 第4章 「はじめに」を書く

- 【16】要約ときっかけ
- 【17】動機と自己紹介
- 【18】ターゲットと効能
- 【19】予告と注意事項
- 【20】「もくじ」と全体の組み立て

## 第5章 「第一幕」の組み立て

- 【21】期待
- 【22】実績
- 【23】本題
- 【24】条件
- 【25】方法

## 第6章 最後まで組み立てる

- 【26】内容の再現性
- 【27】「第二幕」の書き方
- 【28】「第三幕」の書き方
- 【29】「おわりに」と「おまけ」
- 【30】サブタイトルを考える

## 執筆編

## 第7章 文脈は明快に

- 【31】わかりやすい文章
- 【32】主語と述語
- 【33】接続語
- 【34】修飾語と視点
- 【35】指示語と人称代名詞

## 第8章 文は簡潔に

- 【36】ムダな枝葉を取り去る
- 【37】効率のよい語り方
- 【38】語尾は適切か
- 【39】話し言葉と書き言葉
- 【40】会話文とユーモア

## 第9章 語句は平易に

- 【41】文字をひらく
- 【42】語句の言い換え
- 【43】リズムと句読点
- 【44】イメージが伝わるように書く
- 【45】書き手の姿勢

## 心得編

### 第10章 説得力をもたせる

- 【46】事実と意見は分けて書く
- 【47】主観と客観
- 【48】正確な説明と具体性
- 【49】部分と全体
- 【50】感動を伝える

### 第11章 全体を整える

- 【51】文章の基本は800字
- 【52】200字でなにが書けるか
- 【53】説明と要約
- 【54】キャッチー
- 【55】文体がある

### 第12章 完成度を高める

- 【56】書きながら直さない
- 【57】書き直しの手順
- 【58】文章をみがきあげるコツ
- 【59】理念とタイトル
- 【60】他人に原稿を見せてもらう

おわり

## 企画編

ここでは、作品のねらいを明確にする。

モチーフ、テーマ、セオリー、メッセージといった用語を目印にして、文章の得意な人がほとんど無意識にやっているコンセプト作りの方法を身につける。

### 第1章 ハウトゥ本の本質

## 【01】どんな内容が求められているか

文章を書いて生活できれば.....なんて考えている人は多いが、みんな、なかなか行動に移さない。

「書くネタがない」

という人は、ホントはいい情報をもっているのに気づいていない、情報を商品化するノウハウを知らないだけなのだ。

書いて発表した経験があるけど、売れなかったという人は、たとえ無料でも読み進めてもらえないような内容だったにちがいない。

よく、野球の解説者などで、

「根性で打て」

などとムチャを言う人がある。

野球はバットでボールを打つスポーツだ。

根性で打てというなら、根性というものがどこにあって、どうやって打つのか、そんなもので打ってルール違反にならないのか、といったことを教えてくれなくてはこまる.....というのは冗談だが、ハウトゥ本と称しながら、この手の精神論を唱える著者は多い。

「火事場のクソ力」

というなら、どうすれば必要なときに発揮できるか解説してくれなければ意味がない。

巷の文章教室では「個性がなくてはダメ」「感性を磨け」と言って、そのクセ、どうやれば感性を磨けるかは教えない。

せいぜい、名文や名作を読めと言われるぐらいだが、あれはウソである。

その名作とやらをみんな学校の授業で読まされたのに、文章はヘタなままじゃないか。

学校の作文指導がダメなのは、教師がなにをどう教えていいかわかっておらず、

「いちばん印象に残ったことを書きなさい」

などと大ざっぱなことを言うからだ。

もし、正直な子供が遠足の作文に、

「Aくんがオナラをしたこと」

と書けば、最低の評価しかもらえない。

書いた子供は悪くない(要領は悪いが)。

伝えるに値する内容を見つける手順やそれを伝える文章術をこまかく教えないせいだ。

**サンプル版はここまでです。**